「兵庫のコリアン・中国人・連合国軍捕虜」ノート

- 神戸電鉄朝鮮人労働者モニュメント（『人権歴史マップ』淡路神戸増補版）　2頁
- 神戸港平和の碑（『人権歴史マップ』淡路神戸増補版）　3頁
- 阪神教育闘争犠牲者・朴柱範さんの遺族と解放前の「本庄村」を訪ねる（現神戸市東灘区）『むくげ通信』168号、1998.5.31　4頁
- 東福寺の朝鮮人無縁仏（『人権歴史マップ』淡路神戸増補版）　5頁
- 大倉山公園と青丘文庫（『人権歴史マップ』淡路神戸増補版）　6頁
- 神戸連合国軍捕虜病院跡（『人権歴史マップ』神戸版）　7頁
- 連合国軍捕虜と神戸空襲（『神戸大空襲――戦後60年から明日へ――』）　8頁
- 尼崎・中国人強制連行（『人権歴史マップ』阪神版）　9頁
- 武庫川改修工事と朝鮮人（『人権歴史マップ』阪神版）　10頁
- 鶉野飛行場跡（『人権歴史マップ』播磨版）　11頁
- 神戸の外国人墓地（『歩いて知る朝鮮と日本の歴史――兵庫のなかの朝鮮』）　12頁

2017年2月5日　第1版発行

飛田雄一（ひだ　ゆういち）
〒657-0064 神戸市灘区山田町3-1-1
神戸学生青年センター内
TEL 078-851-2760 FAX 078-821-5878
e-mail　hida@ksyc.jp

定価：100円

⑭ 神戸電鉄朝鮮人労働者モニュメント

神戸電鉄は鈴蘭台を経由して、東には有名な観光地の有馬温泉や三田に、西には当初の主要な観光地であった広野ゴルフ場や三木に繋がる路線をもつ神戸の動脈のひとつである。現在も六甲北部の住宅地と市街地を結ぶ鉄道として多くの人に利用されている。

神戸電鉄は神戸有馬電鉄（一九二七～二八年敷設）と、三木電鉄（一九三六～三七年敷設）が一九四七年に合併して設立された。一九二〇年代、三〇年代の敷設工事には多くの朝鮮人が従事していた。その人数は一二〇〇名から一八〇〇名と推定されている。山間を走る路線では多くの事故が起こったが、新聞記事から確認される死亡事故は次の五件、死亡者は一三名である。

一九二七年八月一日、二名、山田村下谷上、竹藪切取り工事中に土砂崩壊／一九二八年一月一五日、二名、神戸市東山町四丁目東山トンネル東入口、夜間作業中／一九二八年五月七日、二名、山田村原野字奥谷、墜落した石の下敷／一九二八年一〇月二三日、一名、鳥原水源地奥、トロッコ同士衝突／一九三六年一一月二五日、六名、山田村藍那トンネル東入口、土砂崩壊

東山トンネルの事故は深夜工事中に起こり、落盤事故で二名の朝鮮人労働者が死亡した。藍那トンネル事故は一一名が生き埋めとなり、そのうち六名が死亡するという神戸電鉄敷設工事最大の事故であった。

犠牲者のうち金鳳斗と金東桂は慶尚南道固城出身の親子であった。

神戸電鉄湊川駅の工事は後に埋め戻す工法で行われたが、一九二八年七月二六日の大阪毎日新聞（神戸版）には「生くる悲哀／炎熱地獄に苦闘する鮮人労働者の群がり」という記事とともに「炎天下に喘ぐ鮮人労働者」という写真が掲載されている。また工事の過程で過酷な労働条件を反映して四回にわたって労働争議が起こっている。要求は「毎月一回の勘定支払」「飯場家賃の撤廃」などであるが、一九二七年に一二〇〇名の朝鮮人労働者が参加したストライキは戦前において全国的にも有数の労働争議であった。

大阪毎日新聞（神戸版）1928. 7. 26

神戸電鉄敷設工事朝鮮人労働者の像

一九九二年から始まった「神戸電鉄敷設工事朝鮮人犠牲者を調査し追悼する会」の活動により、韓国在住の東山および藍那トンネル事故犠牲者の遺族とも連絡をとることができ、一九九四年八月には、遺族を招待しての追悼集会が、神戸電鉄の菩提寺である神戸市北区の興隆寺で開催された。遺族は、「お父さんが日本のどこで死んだかも知らされていなかった。恨んでも恨みきれない」と語っていた。

阪神・淡路大震災（一九九五年一月一七日）ののち、同追悼する会は、一九九六年一一月二四日、金城実氏制作の朝鮮人労働者のブロンズ像を建立した。落成式には韓国から遺族も出席し、遺族代表、追悼する会代表、朝鮮総連代表、韓国領事による序幕が行われた。ブロンズ像は神戸市兵庫区会下山公園の南東に設置されており、毎年一〇月の第三日曜日に追悼集会が開かれている。

（飛田雄一）

神戸電鉄敷設工事朝鮮人労働者の像
神戸市兵庫区会下山町3

⑪ 神戸港 平和の碑

南京町西門（西安門）より南へ下がると緑色のKCCビルが見えてくる。二階に神戸華僑歴史博物館のあるビルだ。そのビルの前に「神戸港 平和の碑」があり、日本語、英語、中国語、朝鮮語、四言語のプレートが貼られている。日本語は次のとおりだ。

アジア・太平洋戦争時期、神戸港では労働力不足を補うため、中国人・朝鮮人や連合国軍捕虜が、港湾荷役や造船などで苛酷な労働を強いられ、その過程で多くの人々が犠牲になりました。私たちは、この歴史を心に刻み、アジアの平和と共生を誓って、ここに碑を建てました。

２００８年７月21日

神戸港における戦時下朝鮮人・中国人強制連行を調査する会

国際都市として知られる神戸港はまた軍港という側面も持っていた。今も遊覧船で港内を巡ると川崎重工のドックに自衛隊の潜水艦が入っていることがある。

アジア・太平洋戦争の時期、三菱重工神戸造船所、川崎重工神戸艦船工場などの軍需工場では、工員が兵士として戦場に送られたあとの労働力不足を補うために、女性や中学生以上の学生・生徒も動員された。さらに一九三九年以降は、「朝鮮人労務者内地移住に関する件」という文書によって朝鮮人強制連行を開始した。一九四四年八月、徴用令によって咸鏡南道から強制連行された朴球會さんは、川崎重工神戸艦船工場で働かされた。朴さんの証言によると、宿舎の東垂水寮には約三〇〇〇名の朝鮮人が収容されており、省線（現ＪＲ）で塩屋駅から神戸駅まで行き、そこから工場まで徒歩で通ったという。潜水艦の伝声管製作の単純作業で、「空腹が一番苦痛だった」とも語っている。一九九〇年に公表された「いわゆる朝鮮人徴用者等に関する名簿の調査について」（「厚生省名簿」）にはすべての企業の名簿ではないが、神戸関係では、三菱重工神戸造船所一九八四人、川崎重工葺合工場一三九八人、神戸製鋼所本社工場四一三人、神戸船舶荷役株式会社一四八人などの名簿がある。

中国人は一九四二年一一月二七日に閣議決定された「華人労務者内地移入ニ関スル件」により日本全国一三五の事業場に四万三〇〇〇人が強制連行された。そのうちのひとつ神戸船舶荷役株式会社には九九六人が強制連行されたが、神戸空襲が激しくなり神戸港での作業が困難となってからは、三三〇人が室蘭、函館、七尾、敦賀に移されている。神戸港では一七名が亡くなっているが、更に送り先の函館で四八人、七尾で三人、敦賀で一人が亡くなっている。彼らは、宇治川商店街南入口から少し東の戎井旅館を接収した新華寮などに収容されていた。

一九九九年七月に来神した黄国明さんの証言によると、「当時、岸壁についた荷物を倉庫に運び、また倉庫のものを船に運ぶという労働をさせられた。朝四時に起こされて夜一二時まで働かされたこともあった。一日三回の食事だったが一回にまんじゅう二個で、お腹がすいてゴミ箱からミカンの皮を拾って食べたこともある」という。

東南アジアで日本軍の捕虜となったアメリカ、イギリス、オーストラリア、オランダ、中国の兵士約三万六〇〇〇人が日本に送られそのうち約六〇〇人が神戸に連行された。神戸市役所南にあった収容所に入れられ、川崎重工神戸艦船工場などで働かされた（連合国軍捕虜については五六頁⑩参照）。

一九八九年一〇月に結成された神戸港における戦時下朝鮮人・中国人強制連行を調査する会（代表・安井三吉）が調査活動を進め、二〇〇八年七月にこの碑が建立された。

（飛田雄一）

神戸港 平和の碑

神戸港 平和の碑
神戸市中央区海岸通 3-1-1　KCC ビル

阪神教育闘争犠牲者・朴柱範さんの遺族と解放前の「本庄村」（現神戸市東灘区）を訪ねる

今年1998年は「阪神教育闘争」の50周年にあたる。50年前の「4月24日」に最大の山場を迎えたので「4・24阪神教育闘争」とも言われている。

1945年8月15日の敗戦（解放）以降、日本全国で在日朝鮮人の自主学校が作られた。その学校にGHQが圧力を加え、それをはねかえすために全国的に闘われた運動の中で最大のものが「阪神教育闘争」である。大阪では金太一少年が射殺され、兵庫では当時朝連兵庫県本部委員長の朴柱範さんが、1949年11月25日、病気によって仮出獄した4時間後に死亡した。「獄死」に等しいものだ。

その朴柱範さんの遺族が94年4月の「長田マダン」がきっかけで韓国におられることがわかり、50周年の今年、招請が実現したのである。（『むくげ通信』165号、飛田訪問記参照）

今回、「阪神教育闘争５０周年記念神戸集会実行委員会（代表、徐根植・飛田雄一）」が招請した遺族は4名。記念シンポジウムは去る4月23日、神戸学生青年センターで開催され、記念講演（金慶海氏）や体験者・遺族の証言が行われた。

遺族は25日の大阪集会にも参加され忙しいスケジュールだったが、神戸集会の翌日２４日には、せめて一日観光をと、できたばかりの明石架橋を通って四国鳴門までご案内した。戦前の神戸しか知らない遺族たちはみんな喜んでくださった。夕方、宿舎の神戸学生青年センターにもどるとき、戦前に父親の朴柱範さんと生活した本庄村（現神戸市東灘区）のことになると、皆が懐かしそうに話される。そして、やはり行ってみよう、ということになった。

神戸集会で証言する朴再禧さんと通訳の金慶海氏

最初に行ったのは国道2号線北、神戸市の東の端にある森市場のところである。現在森市場は、5階建？のショッピングセンターになって当時の面影はない。しかし、2号線をはさんで南側の小さな医院の場所をさしてここに住んでいたという。朴柱範さんは、戦前には雑貨商や飯場を行いながら、キリスト教の集会を主宰されたり、村会議員（1937年と42年に当選）、阪神消費組合幹部としても活躍された方である。その医院の場所でも2階でキリスト教集会をしていたという。

車でその辺りを回りながら次に訪ねたのが阪神青木（あおき）駅である。駅の南東には当時のままに小さな神社と公園があった。その神社から更に東に150メートルほど行ったところで、「ここに長いこと住んでいて消費組合の仕事もキリスト教集会もしていた」と大感激だった。この地域は先の阪神大震災で被害の大きかったところでほとんどの家が新築されていたが、その場所は確定することができたのである。（飛田）

※『忘れまい４・２４―阪神教育闘争５０周年記念誌』（Ｂ５版、３２頁、４００円、希望者は送料ともで560円を80円切手７枚でむくげの会までお送り下さい。）

『むくげ通信』168号（1998.5.31）より

⑨ 東福寺の朝鮮人無縁仏

東福寺は新神戸駅南約七〇〇メートル、新生田川左岸、神戸市立中央小学校南にある。圓通幸温前住職のお話によると先代の住職のとき、一九四五年六月の神戸大空襲ののち「川崎製鉄や神戸製鋼で働いていた朝鮮人の遺骨が約五〇体分、長さ一二〇センチ、高さ六〇センチ程度の箱に、骨を砕いたのをぎっしり詰め込んで三つ持ち込まれた」という。現在は、ビルマのパゴダ様式の仏舎利塔に他の日本人の無縁仏とともに葬られている。

兵庫県下ではアジア・太平洋戦争時に米軍による空襲が延べ五五回あった。約七七万人が被災し、朝鮮人も二万五〇〇人が戦災を受けたとされている。犠牲者の数は確定できていないが、多くの朝鮮人が犠牲となったことが想像される。その中には強制連行されて当時神戸で働かされていた朝鮮人も含まれている。

強制連行名簿（一九四六年九月厚生省作成）の残されている川崎製鉄葺合工場について見てみると、空襲による犠牲者として一九四五年三月一七日（一名）、六月五日（四名）、六月一五日（二名）、八月五日（一名）、日時不明（一名）の計九名が記載されている。三菱重工神戸造船所については、二月四日（一名）、三月一七日（五名）の計六名、川崎製鉄兵庫工場については、二月四日（二名）、日時不明（四名）の計六名となっている。また名簿はないが「社史」では一六〇〇名の朝鮮人が労働していたという川崎重工神戸艦船工場の垂水第三寮でも、六月の大空襲の時に一四名の朝鮮人が犠牲となったという証言もある。神戸市以外の地域では、名簿の残っている播磨造船所で七月二八日の空襲での五名の朝鮮人の死亡が確認できる。

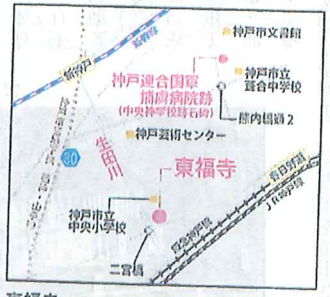
また、強制連行された朝鮮人の「逃亡者」の数は相当数にのぼるが、川崎製鉄葺合工場では、

東福寺にある仏舎利塔

東福寺境内

名簿によると、六月五日の空襲の日に七〇余名の逃亡者があったとされている。東福寺に持ち込まれた朝鮮人の無縁仏が誰のものであるのかは特定できないが、この葺合工場の朝鮮人労働者が含まれている可能性は否定できない。工場側が空襲の犠牲者を逃亡者として処理したことも考えられるのである。名簿は残っていないが神戸市中央区の葺合警察署の近くに、当時、川崎製鉄の寮があり、平安北道出身の朝鮮人労働者が二〇〇～三〇〇名いて、六月の大空襲の時、三ヶ所の防空壕に避難したが、彼らのほとんどが死亡したという証言もある。アジア・太平洋戦争下の神戸で、米軍による空襲は激しいものだったが、日本人犠牲者とともに朝鮮人も犠牲となっており、遺骨のひきとり手がなかった朝鮮人の遺骨が、心ある住職によって受け取られ、いまも無縁仏として供養されている事実を銘記する必要がある。

（飛田雄一）



東福寺
神戸市中央区国香通 7-2-6
TEL：078-221-5128

⑤ 大倉山公園と青丘文庫

大倉山公園はJR神戸駅の北に位置する、グラウンドや神戸市立中央図書館がある市民の憩いの場である。この公園はホテルオークラなどでも知られる大倉喜八郎の別荘であったものを、後に神戸市に寄付したものである。大倉は朝鮮大倉農場を経営するなど、朝鮮を舞台として富を築いた。大倉と初代兵庫県知事であり、かつ初代朝鮮統監府の統監であった伊藤博文とは関係が深いが、その大倉山公園に伊藤博文の銅像があったのである。いきさつは次のようなものである。

伊藤博文の銅像

明治の終わりごろ、桂太郎首相や財界が、首相を四回も務めた伊藤博文の銅像を作った。設置場所に伊藤が湊川神社を希望したので、一九〇四（明治三七）年一〇月二二日、湊川神社の本殿右側に設置された。しかし、日露戦争後のポーツマス条約の内容に怒った民衆が、一九〇五（明治三八）年九月七日、その銅像を倒してしまった。朝鮮を植民地化するのに功績をなした伊藤は、朝鮮人からみれば民族の敵である。伊藤は朝鮮統監の在任中の一九〇九（明治四二）年一〇月二六日、ハルビンで朝鮮人の独立運動家安重根によって射殺された。伊藤死亡を契機に銅像再建の話がもちあがり、神戸を見渡せる諏訪山公園に再建することになった。しかし大倉はその場所が不便であり、訪れる人も少ないであろうから、自身所有の大倉山を神戸市に寄付してそこに建てることになった。そしてその像は一九一一（明治四四）年九月に完成した。

伊藤博文の像のあった台座

ところが皮肉なことに太平洋戦争の時期に「金属供出」によってこの像も提供されてしまい、現在はその立派な台座だけが残っている。

神戸市立中央図書館は、地元の人は大倉山図書館と親しみをこめて呼んでいる。阪神・淡路大震災後に増築工事が行われ、別館特別室に朝鮮史の図書館「青丘文庫」が入った。この文庫は実業家であり朝鮮キリスト教史の研究者でもあった故韓晳曦氏が、長年収集してきた約三万点のコレクションを収めたもので、日本国内で朝鮮近代史を中心とした基礎資料が体系的に収められている図書館としてよく知られている。

青丘文庫の内部

韓氏が一九七〇年ごろから自宅で自身の研究のために収集を始めた本であったが、一九七二年に長田区のゴム工場の自社ビルの一部に移され、更に一九八六年には須磨区に新築された自宅に移転した。そして震災ののち中央図書館に移されたものである。図書は申請をすれば誰でも利用することができるようになっており、文庫では毎月一度（基本的に第二日曜日）に在日朝鮮人運動史研究会と朝鮮近現代史研究会が開かれている。この研究会も自由に参加できる。一度は足を運んで欲しい施設である。

（飛田雄一）

大倉山公園
伊藤博文像台座
神戸市中央区楠町７
TEL：078-341-6648
青丘文庫（神戸市立中央図書館）
神戸市中央区楠町７-２-１
TEL：078-371-3351

⑩ 神戸連合国軍捕虜病院跡

アジア・太平洋戦争で捕虜となり東南アジアで抑留されていた連合国軍捕虜のうち約三万六〇〇〇人が労働力として日本に移送された。それ以外に移送の途中で病死・衰弱死あるいは船が撃沈されて約一万一〇〇〇人が亡くなっている。捕虜の正確な人数は分からないが敗戦時に兵庫県下で一六三六人、そのうち神戸市内が五四五人となっている。極度な労働力不足に陥っていた日本は、朝鮮人・中国人を強制連行する一方で連合国軍捕虜も労働力として日本に連れてきたのである。当時神戸で抑留生活をしたオーストラリア人・ジョン・レインさんは、当時のことをユーモアをまじえて詳細に記録した『夏は再びやって来る―戦時下の神戸・オーストラリア兵捕虜の手記』（平田典子訳、神戸学生青年センター出版部）を残している。

神戸市内の捕虜は、神戸市役所南の神戸分所、一九四五年六月の空襲の後は、丸山分所、その後は脇浜分所に収容されていた。それともうひとつ神戸捕虜病院が設置されていた場所は、現在の神戸市文書館（旧南蛮美術館）南である。

捕虜病院跡に建てられている中央神学校跡の石碑

ここには賀川豊彦が卒業したことでも知られる中央神学校（一九〇七年創立、一九二七年に改称）があったが、戦争の激化とともに一九四一年自主閉鎖して宣教師は本国に引き揚げた。その建物を日本軍が接収して捕虜病院としたのである。現在はマンションがたっているが、小さな公園の一角に神学校の跡地であることを示す石碑が立っている。一九四五年六月の神戸空襲の時に、三名あるいは七名の捕虜が死亡したといわれている。またその時、南蛮堂（後の南蛮美術館）に所蔵されていた、池永孟の所蔵品が燃えかけたのを、捕虜が消し止めたという逸話も残っている（高見沢たか子『金箔の港―コレクター池長孟の生涯』）。

1944年秋に神戸で撮影された捕虜病院での軍医たち
『アジア・太平洋戦争と神戸港』（神戸港における戦時下朝鮮人・中国人強制連行を調査する会編刊、2004年）より

六月の空襲ののち、神戸市長田区の丸山分所（現在の神戸市総合療育センター）に病院も移転している。戦争末期には医療設備・薬品が著しく不足し、病院としてはほとんど機能していなかったといわれている。

病院には大橋兵次郎（故人）という日本人軍医がいたが、氏について当時同病院で働かされていた米海軍軍医のラーレー・グラスマン氏は「ついに一人の医師にして軍人、そして本当の紳士にわれわれは出会った」と語っている。大橋氏に会いたいと願っていた病床のグラスマン氏の代わりに二〇〇二年七月来神した息子（ジョン・グラスマン）は、病院跡などを訪問し、息子同士が感動的な出会いをしている。

丸山分所からおそらく最終的に脇浜分所に移動した捕虜病院の捕虜たちは、敗戦の年の八月末あるいは九月の初めに全員が大阪の病院に移動している。

（飛田雄一）

神戸連合国軍捕虜病院跡
（中央神学校跡石碑）
神戸市中央区熊内町1
熊内小公園内

連合国軍捕虜と神戸空襲

飛田　雄一

アジア・太平洋戦争によって日本軍の捕虜となった連合国の兵士も神戸空襲の犠牲になっている。捕虜の正確な人数は分からないが敗戦時に兵庫県下で一、五二六人、そのうち神戸市内が四八八人となっている（ただし捕虜病院関係の数が不明で除いてある）。

神戸には大阪捕虜収容所の神戸分所として一九四二年九月二一日、神戸市神戸区伊藤町二八（現在の中央区、神戸東遊園地西隣）にオリエンタルホテルの倉庫を利用して作られ、一〇月五日には四〇〇人が入所した。また同年一二月八日、長田区丸山町二丁目に川崎（丸山）分所が開設され最大時には六〇〇名が収容されていたが、四五年五月一一日、捕虜を広島と福岡に移動させて閉鎖した。しかし、同年六月五日の空襲で被災した神戸分所および神戸捕虜病院（葺合区熊内町、一九四四年七月一〇日開設）の捕虜は、一旦閉鎖された川崎（丸山）分所に収容されることになった。

また、脇浜分所は一九四五年二月一日、葺合区（現・中央区）脇浜三丁目の脇浜小学校の校舎を利用して開設され、二九七人が入所していたが、五月二〇日に閉鎖された。その跡地に、空襲で焼け出されて一時川崎（丸山）分所に移動していた神戸分所の捕虜が再移動して、同年六月一九日に再開した。神戸市内の捕虜は、神戸捕虜病院に収容されていた者を除いて、この脇浜分所跡地で終戦を迎えることになる。

四五年六月五日の神戸分所での空襲の様子は当時ここに収容されていたオーストラリア人捕虜・ジョン・レインによる『夏は再びやってくる』（平田典子訳、二〇〇四年三月、神戸学生青年センター出版部）に生々しく描かれている。神戸分所では幸い死者は出なかったようであるが、同日の捕虜病院では空襲により三名が死亡している。

捕虜病院は、神戸中央神学校を接収して開設されたものだが、北隣の南蛮堂（後の南蛮美術館、現在は神戸市文書館）も空襲に見舞われた。創設者・池永孟の娘・高見澤たか子は、「南隣の神学校の建物に収容されていた米軍捕虜が、一階の澄の部屋に飛び火したのを消し止めてくれたのである」と回想している（『金箔の港―コレクター池永孟の生涯』一九八九年、筑摩書房）

一九四四年当時「神戸警備隊中部四六部隊」で捕虜等の監視にあたっていた松本充司さんは連合軍関係の民間人抑留所の場所を記入した地図を提供してくださったが、神戸港における戦時下朝鮮人・中国人強制連行を調査する会の例会に参加した松本さんは、神戸空襲でその民間人抑留所の人々が無事であったかが知りたくて来たと話されていた。当時市内に四ヵ所あった民間人抑留所は、一九四四年五月に統合され、再度山に移転していたので、幸い空襲による犠牲者は出なかった。

〔参考文献〕

・福林徹『大阪捕虜収容所について』（二〇〇二年六月、自費出版）

・神戸港における戦時下朝鮮人・中国人強制連行を調査する会編『神戸港強制連行の記録―朝鮮人・中国人そして連合国軍捕虜』（二〇〇四年一月、明石書店）

〈ひだ・ゆういち　神戸学生青年センター館長〉

三宮・東遊園地で、捕虜収容所跡の説明を聞く戦跡ウォークの参加者。県立友が丘高校の放送委員が記録映像を制作した（2005年6月）

神戸空襲を記録する会編『神戸大空襲―戦後60年から明日へ―』神戸新聞出版センター　2005.12　より

③ 尼崎・中国人強制連行

アジア・太平洋戦争の時期に日本国内の一三五ヶ所に中国人が強制連行された。『外務省報告』によると兵庫県では、神戸港に九九六名、播磨日ノ浦工場に九四〇名が連行された。この二ヶ所以外に意外なルートから中国人が強制連行されていたことが明らかとなった。それが尼崎・大日電線（現・三菱電線工業尼崎事業所）への中国人強制連行である。

塚崎昌之さんが二〇〇一年一一月、防衛庁図書館（現・防衛省図書館）で見つけた「昭和二十年九月移入華人労務者現況調」に『外務省報告書』にない中国人三八名の名簿があったのである。彼らは一九四二年一月、インド洋で日本軍に拿捕されたオランダ貨物船に乗船していた中国人で、そのまま日本に連れてこられ、同年四月より大日電線で働かされていた。三八名のうち四名が日本で死亡し、三四名が戦後に帰国した。死亡原因はその名簿によると「外傷死」一名、病死三名となっている。これらの中国人については、拿捕当時、日本軍に敵対行為をしていた記録がないことなどから、当時の国際・国内法規上も彼らを拿捕することはできないはずだ。にもかかわらず彼らは大日電線で、四五年八月までの三年間、不当に強制労働をさせられたのである。

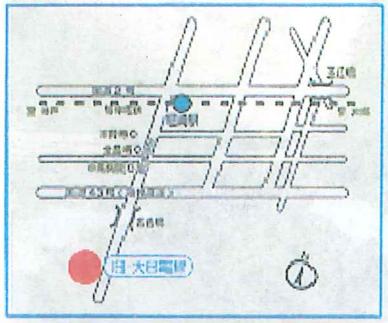
神戸市中央区在住の華僑・王鳳鳴さんは、東京大学の医学生時代に大日電線の工場長が王さんの近くに住んでいた関係で、二度大日電線を訪ねて強制連行された中国人と会っている。王さんは、「外務省報告書」の中国人強制連行のことは聞いていたが、尼崎大日電線の中国人のことが伝えられないのはどうしてだろうかと常日頃考えておられたとのことだった。「神戸港における戦時下朝鮮人・中国人強制連行を調査する会」が勉強会で大日電線の中国人のことを取り上げるという新聞報道を見て、同会に連絡をくださったのである。

一、二回目はよく覚えていないが、三回目は四五年の春休みで帰省している時だった。工場の門を入ると広い道の左側に二間半×三～四間か五～六間ぐらいの窓のない、床が板敷きで屋根が低い馬小屋のような建物があった。中国人たちがそこで寝泊りしていたのか、休憩所だったのかわからないが、もしそこで寝起きしていると思うと涙がでそうだった。食べ物も推して知るべき状態で、栄養状態も良くなかった。出会った中国人に私が上海語で『こんな生活をされて不自由で辛かろうけれども、まもなく戦争が終わる。命を大事にしてくれ』とのことをしゃべった。ここに私が来たことが知れたら大変なことだという意識があり、話を聞かれていないかとびくびくしていた」と、王さんは私たちのインタビューに答えてくれた。

尼崎では、アジア・太平洋戦争の時期に日亜製鋼、吉川電気、大同製鋼、久保田鉄工所などに朝鮮人が強制連行されている。同じ時期にインド洋で拿捕されたオランダ貨物船から中国人三八名も尼崎まで連れてこられ、強制労働を強いられたのである。尼崎にこのような歴史があったことを記憶にとどめておきたい。

（飛田雄一）

旧・尼崎大日電線（現在は三菱電線工業尼崎事業所）



旧・大日電線
（現・三菱電線工業尼崎事業所）
尼崎市東向島西之町8番地
阪神電鉄尼崎駅から徒歩約20分

❼ 武庫川改修工事と朝鮮人

武庫川は篠山の南を源とする六六キロの二級河川で大阪湾に注いでいる。現在、宝塚以南には遊歩道・サイクリング道もあり市民の憩いの場となっている。

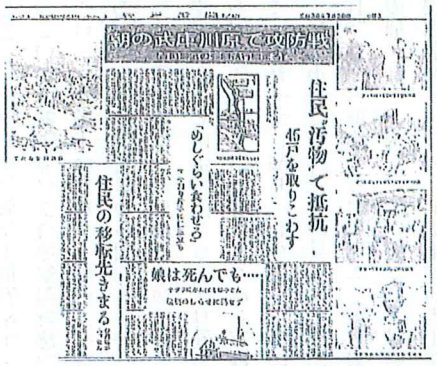
武庫川は昔から氾濫を繰り返した川で一九二〇年から八年の歳月をかけて逆瀬川から大阪湾まで一三キロについて改修工事が行なわれた。この工事に多くの朝鮮人が動員された。「人夫の総数六五三、四五〇人のうち二〇万余人の朝鮮人を使役したから本工事は実に朝鮮人の努力によって竣工したと言っても過言でない」との溝口西宮工営長の発言がある（神戸新聞、一九二三年一二月一〇日）。

改修工事ののち飯場あとに朝鮮人集落ができた地域もある。たとえば宝塚市伊子志には「ヨンコバ」といわれた朝鮮人の集落がいまも残っているが、武庫川改修工事四番目の飯場「第四工場」から生まれた言葉だと言われている。

敗戦後に武庫川河原のいわゆる「不法住宅」が増加し、兵庫県河川課『武庫川不法占拠措置の記録』（一九六三年三月）によると、一九五八年には六八四世帯、二一七五人に達したとある。出身地別内訳として、「内地人」五〇六世帯、一五三八人、「沖縄人」四一世帯、一三七人、「韓国及朝鮮人」一三七世帯、五二九人という数字があげられている。

これらの住宅に対して一九五八年一二月に兵庫県知事名で「立ちのき勧告」を出して以降、様々な方法で住民のたちのきを迫っている。

そして一九六一年七月には「代執行」が行なわれた。住民たちは激しく抵抗し、その様子は新聞に大きく報道されている。この代執行のときに公務執行妨害、傷害などで逮捕されている。


朝の武庫川原で攻防戦
住民"汚物"で抵抗
住民の移転先きまる
娘は死んでも…

強制代執行を伝える『神戸新聞』（1961年7月28日）

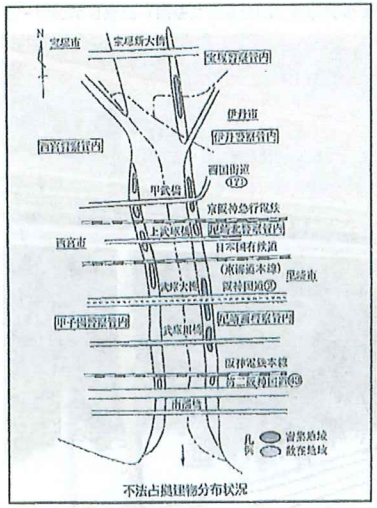
現在の武庫川河川敷。マラソンやサイクリングを楽しむ人が多い。

一九六一年といえば「六〇年安保」の翌年で、この代執行の数日後に「釜ケ崎暴動」が起こっている。先の『記録』には、「もしもこの代執行が延期のために、この事件以降に行なっていたならば、いかなる事態となったかは誰が予測しえたであろう」と記されている。

その後も西宮市、宝塚市の部分に残されていた「不法住宅」がすべて撤去されたのは、一九六三年三月のことである。

鳥のさえずりを聞きながら武庫川河川敷を散歩するとき、このような歴史も思い起こしたい。

（飛田雄一）



強制代執行以前の武庫川
（兵庫県河川課『武庫川不法占拠措置の記録』（1963年3月）より）

『人権歴史マップ（播磨編）』
（2009.11、ひょうご部落解放・人権研究所）

⑰ 鶉野飛行場跡

兵庫県加西市では、アジア・太平洋戦争の時期、現在の北条鉄道法華口駅北側に、鶉野飛行場建設工事が行なわれた。防衛庁防衛研修所戦史室の戦史叢書『沖縄方面海軍作戦』によれば、滑走路の長さ一二〇〇メートル、幅は六〇メートルと書かれている。その滑走路跡は現在自衛隊の管理下にあり、北の端は進入できないようにブロックが積まれているが、あたかも新規の道路工事中で、まだその道が北の方向に延長されるかのような雰囲気である。

飛行場建設工事は海軍姫路航空隊によってなされ、滑走路の他に、機関砲、地下倉庫、高射砲、司令部、掩体壕などが作られた。高射砲跡は神戸大学の付属農場構内に残っている。私事であるが、私は神戸大学農学部在学中の一年間、毎週この農場に実習に行ったが、このことは全く知らなかった。調査で再訪したとき、葡萄剪定の実習をした畑のすぐ横に高射砲跡を見つけてほんとうにびっくりした。高射砲台の地下には、弾薬を貯蔵したであろう強固なコンクリートの地下室もそのまま残されていた。また、地下倉庫跡は、鶉野町の滑走路脇に残っている。いまも強固なコンクリートが露出しているが、当時は半地下の倉庫であったと思われる。

一九四二年から四五年の解放（日本の敗戦）まで鶉野飛行場で働かされた姜萬寿さんは、「おもに飛行場周辺の土木整備をさせられ、飛行場中心地では作業はしていないが、一〇〇〇人を超える朝鮮人労働者がおり、飯場で生活していた」と語っている。

また当時、滑走路の南側の東笠原地区にすんでいた友井公一さんは、一九四三年、中学一年生のときの思い出として次のように語っている。

「いま、司令部のあったところから鶉野を見渡せば、真っ平らで中野や宮木の村が見えるが、当時はいくつもの小高い丘に小松林があった。その小高い丘を削って、村境にある谷を埋めて滑走路をつくった。道具はツルハシとスコップ、土砂の運搬はトロッコとモッコ担ぎ、というきつい仕事である。土砂を満載したトロッコが脱線しているところをたびたび見た。いまから思えば、動かした土砂は大変な量であったろうと、感心する。あれで怪我がなかったら不思議である。」

地下倉庫跡

鶉野飛行場滑走路跡

友井さんの記憶によると、滑走路南側の笠原地区には朝鮮人約五〇〇人が収容されていた飯場があり、全体で一五〇〇名ほどの朝鮮人が労働に従事していたとのことだ。司令部跡と東笠原朝鮮人飯場跡は、法華口の北東すぐのところ、もうひとつの飯場跡は、更に東の中野にある。

この鶉野飛行場について、朝鮮人真相調査団の調査により、加西市旧九会村で「学籍簿」と「寄留簿」の存在が明らかとなった。そこには鶉野飛行場の工事に従事した朝鮮人の足跡が残されていた。学籍簿の評価欄に、「飯場生活ヲスルモ家庭学習ヲ忘レズシテイル」という記述もあり、困難な条件のもとでも勉学に励む朝鮮人生徒の様子が浮かび上がってくる。

飛行場遺跡に今も残るコンクリートの塊は、アジア・太平洋戦争時期の朝鮮人労働の歴史を語ってくれる。

（飛田雄一）

鶉野飛行場跡
加西市鶉野町 2088
中国自動車道加西 IC を出て左折し、飯森交差点を左折、約 500m 先、フラワーセンター南入り口手前を右斜め方向へ約 2 km先右手方向

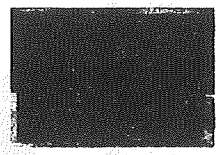
18 神戸の外国人墓地

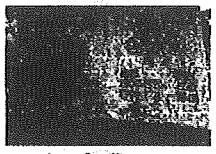
飛田　雄一

神戸市の背山 六甲山系の再度公園に外国人墓地があり、明治以来日本と関わりのあった外国人約2500柱が埋葬されている。1961年にそれまで市内の小野浜と春日野にあった外国人墓地が統合されて、現在の外国人墓地となったのである。パン・洋菓子で有名なフロインドリーブやモロゾフのお墓があることでも知られている。再度公園は神戸市内の小中学校で必ず遠足にいくところで、ハイキングコースとしても有名である。新神戸駅から市が原経由で登ってもいいし、市バスの再度筋バス停から大師筋を登ってもいい。

現在は観光目的の入場は許されていないが、参拝することはできる。入口のインタホンでその旨を告げ、管理事務所で記帳をしてから参拝する。この外国人墓地に朝鮮と関わりの深い二人の宣教師が埋葬されている。アメリカ人のW. B. スクラントン(William Benton Scranton, 1856～1922)とカナダ人L. L.ヤング(Luther Lisgar Young, 1875～1950)である。墓地には「番地」がついているが、スクラントンは「B1区10番」、ヤングは「B1区18番」だ。広い敷地の墓地だが、この番地を知っていればその場所を園内の案内板で容易に探すことができる。

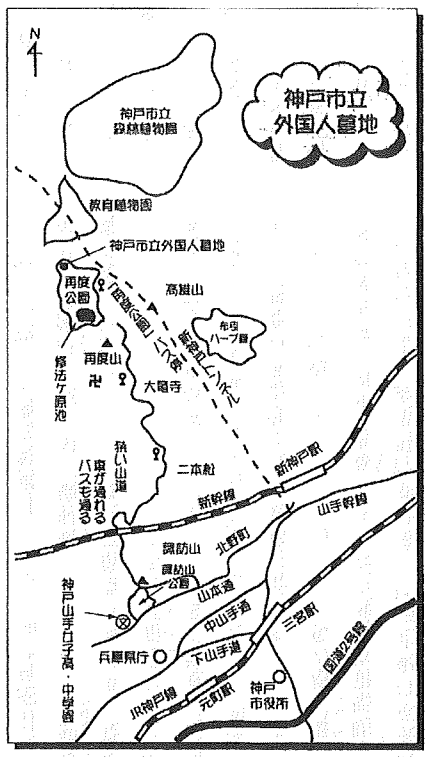
スクラントンは、アメリカ監理会韓国医療宣教師で、韓国名は「施蘭敦」。1856年5月29日、アメリカのコネチカット州ニューヘブンで生まれた。母は、梨花女子大をつくったスクラントン夫人である。エール大学およびニューヨーク医科大学を卒業した後、1885年2月、朝鮮に宣教師として派遣された。北米長老会宣教師H. G. アレンが経営する済衆院、貞洞病院、上洞病院などで医療活動を行った。上洞病院内に上洞教会を設立して牧師としても働き、また


W. B. スクラントンの墓


L. L. ヤングの墓

ハングル聖書翻訳委員会の翻訳委員にも委嘱され聖書事業にも大きな貢献をした。1907年6月、22年間の韓国宣教師としての仕事を終えた。当時、時の政権に近づいて大きな病院をつくる宣教師もいたが、彼は民衆のなかで「裸足の医者」としての働きを最後まで行った。1922年3月神戸で死亡し外国人墓地に葬られているが、神戸での活動は不明である。

ヤングは、1875年2月21日カナダ生まれのカナダ長老会宣教師で、韓国名「榮在馨」。墓碑にはその名がハングルで刻まれている。咸興、城津、元山等の宣教部に配属されて主に教会の仕事に従事したが、1925年から教派を離れて宣教活動を行った。1927年には日本に赴任し、神戸に根拠地をおいて九州からサハリンまで広範囲に散在していた朝鮮人を対象とした宣教を開始し、解放前までに彼が設立した教会だけでも61教会に達する。1931年神戸で彼の宣教25周年記念式が行われ、1934年には韓国人教会だけでつくられた在日朝鮮基督教会（大会）の初代の会長となる。第二次世界大戦勃発により1942年帰国を余儀なくされた。終戦後再び日本に渡って戦後の教会再建に尽力していた1950年2月、日本で死亡した。



【参考文献：飛田雄一「神戸市立外国人墓地に朝鮮ゆかりの宣教師をたずねる」『むくげ通信』167号、1998年／同「L. L. ヤングと在日朝鮮人キリスト者」『むくげ通信』169号、1998年】